

## 「闇色」の眼

尾けられている。

私は、予言師を自称するフピースのもとへ、私がシユカの木で彫った小さな像を納めに行くところだった。四十から八十歳までのいくつにでも見えるフピースは、葉草らしきものやら、お守りの石ころやらとともに、守護の術をかけた——とはフピースの言葉だ——私の彫った木像を売っていた。が、実際には乞食同然である。

そして約四年前に都を捨ててこの村に来た私は、その似非<sup>えせ</sup>予言師から施しを受けて、村はずれで一角犬グンと暮らしている。

すでに日没から二刻（約四時間）も過ぎていた。季節は秋になり始め、夜風にも涼しさを覚えるようになった。

サンナ村を東西に横断する〈へなか道〉と呼ばれる村の目抜き通り沿いには、多くの商店や旅籠、居酒屋、娼館などが並んでいる。フピースは、〈へなか道〉から一本か二本裏に入った通り——品下る飯屋、飲み屋、安い淫売宿が並んでいる——のどこかに座り込んでいるはずだった。

油紙で慎重に包んだ六つの木像——三体は一角犬、二体は女性剣士像、一体は翼を持った蛇の像——を皮の背囊に入れていた。私の住む小屋を出て、さして時間は経っていない。

〈へなか道〉まであと半ラグル（約一・五キロ）の小径で、足音に気づいた。その数、少なくとも三人。

一人は背後、約四十エーム（約十五メートル弱）の距離を維持している。一人は右手背後、左手背後に、同じくらい距離を維持しながら、私の後を尾けている。

私は、尾けられるのが好きではない。

腰に帯びた剣の柄に右手を置いた——いつでも抜けるように。

足を止めた。

背後の三つの足音も、止まった。

私は背囊を下ろし、中身を調べる仕草をした。

一つの足音が、そっと私に近づいてくるのが聞こえた。

「何の用だ？」

足音が止まった。返答は、ない。その代わり、刃を鞘から抜く音が聞こえた。

「やめておいたほうがいいぞ。怪我をする」

返答代わりに、背後でほかの二人が刃を抜いた様子だった。

「あいにく金はない。あんたたちよりも貧乏だ。とつと消えるんだな」

真後ろの相手が動いた。

剣を抜いた。

振り返りざまに、剣先で突いた。

欠けた赤月が西の空に沈もうとしている。その淡い光に照らされ、細身の体が浮き上がった。背丈は、私よりもやや高い。異国の装束ではない。左手を押さえていた。落ち葉の上に鈍く光る諸刃の短剣があった。

人喰い鬼ではなく、少なくとも人間のようだ。

空気が動いた——右手の影。体を沈めた。剣の柄で相手の鳩尾みずおちを打った。

憐れな声。その影が地面にうずくまる前に、私は二人目の影の喉元に剣の刃を当てた。左手で相手の短剣をもぎ取った。闇のなかへ投げ捨てる。

「繰り返すが、金はない。三つ数えるうちに消えないと、あんたの頭と胴体は、二度と出会えなくなる」

男がかすれた息を吸い込んだ。

「たいへんに失礼した」

小径の暗がり——街道に向かう方角から声が聞こえた。

不意にぼうつと橙色の光が浮かび上がった。手提げ灯の明かりを点けたのだろうか。初老過ぎの男の顔が現れた。その脇に、手提げ灯を持った大男が立っていた。従者であろうか。私より、頭二つ分は長身だろうか。肩幅は私の二倍はありそうだった。明かりの加減だろうか、初老の男の深く刻まれた皺が目立った。こけた頬。鷲鼻。はげ上がった頭——。

私は、男の喉から刃を離した。男は這うように闇の奥へ駆け出して姿を消した。

私は右手に剣を提げたまま、背囊を拾い上げ、肩にかけた。

手提げ灯の明かりでは、初老の男の表情は窺えなかった。

「これから人と会う約束がある。あんたたちの相手をする時間はない」

私が言うと、初老の男は慙懃に頭を下げた。

「ぜひ、来ていただきたいのだ、ゴルカンさん」

私は剣を鞘に収めた。

「刃物を持った輩に襲われたんだ。冗談はやめていただきたいな。しかもまだ、ドブナメクジが三匹、そこらで息を潜めている」

男の皺がいつそう深くなった。どうやら、笑ったらしい。

「彼らは黒帽隊くろぼうたいです。ご無礼がありましたら、お詫びします」

「たいへんに無礼だな」

黒帽隊とは、サンナ村の「治安維持」を名目とした集団である。私がこの村に移り住んだ四年前から、すでに存在していた。

村の「治安維持」と言えば聞こえはいい。しかし、都の〈衛士隊〉とはかなり質が異なる。単に剣の腕さえあれば、どんな連中でも起用されるらしい。商店から「警備代」と称して金を取ったり、黒帽隊の名を笠に着て、さまざまあさまな阿漕あこな真似をしているようだ——行きつけの居酒屋〈クトラシア〉の主人、ヘスクスから何度も愚痴を聞かされたものだ。

「私の名前を知っているなら、なぜ私の家へ来ない？」

男の顔の皺が、さらに深まった。喉の奥底がひくっひくつと鳴った。

「こう見えても、忙しいんだ。あんたに付き合っている暇はない」

私は剣を鞘に収めた。歩き出した。〈なか道〉に出るためには、初老の男とその巨大な下僕の脇を通り過ぎなければならぬ。私は剣の柄に右手を置いたまま、足早に進んだ。

初老の男に近づくと、手提げ灯を持ったむくつけき大男の従者が私の目の前に立ちはだかった。

初老の男は言った。

「屋敷へ来ていただきたい。わしは、ソルドーだ」

名乗っただけで、すべてが解決するかのような物言いだった。

「仮にそれがあんたの本名だとして、なぜ私が行かなければならない？」

明かりの向こうで、初老の男の皺がさらに深くなった。またも喉の奥を鳴らした。

「ゴルカンさん、あなたは、何もわかっていない」

男は言った。

次の瞬間だった。背後に気配——剣に手を掛けた。が、首筋に鋭い痛みを感じた。剣を抜いた——つもりだった。

眼前がちらちらとまたたいた。

——毒矢。

気づいた次の瞬間、私は暗黒に包まれた。

最初に気づいたのは、またたく炎だった。薄目を明ける。どうやら死んではないらしい。

炎の正体は暖炉だった。赤々と燃えている。

私は瀟洒な広間の長椅子に座らされていた。床には緋色のふかふかとした絨毯が敷き詰められている。

かすかに頭が痛むが、宿酔程度ふっかよいだった。この程度なら、慣れている。

「先に飲っていたよ」

声の聞こえたほうへ顔を向けると、鋭い痛みが首筋を駆け抜けた。いや、宿酔程度ではないな、と思いついた。

老人は、私から見て左手、安楽椅子に腰掛け、やや大ぶりの盃を手に使っていた。かなりはげ上がった頭。しかし頬から顎へ白い髭をたくわえている。その黒い眼には、歳不相応のぎらぎらとした光があった。

男の前の低い机には、濃緑色の瓶ともう一つの盃があった。彼は盃に薄青い液体を注ぐと、それを手にして立ち上がり、歩み寄って来た。

盃を差し出す。

「私は、あなたの手下に矢で毒矢で刺されたんだ」

思いの外、私の声はかすれていた。

「安心したまえ。矢に塗つたのはパデスウの樹液だ。ただ眠らせるだけで、あなたの体に害は与えていない」

気分をたいへんに害していたが、声を出せなかった。

「お疑いか。では、失礼を承知で」

男は盃の液体を一気におおり、舌で転がすようにしてから、ゆつくりと飲み下した。「アーズカ酒の二十四年もの——白龍の年の産だ。こんな田舎村ではなかなか手に入らん」

男は再び小机に戻ると、もう一度盃を酒で満たし、私に手渡した。

今度は、私も受け取り、一度盃のなかを見つめた。薄い青色の液体。白い盃の色に映えている。

一口含んだ。

「なんとね」

本物のアーズカ酒ではないか。最後に飲んだのが何年前だったか、もはや忘れてしまったが。

飲み下すと、喉が火傷しそうだった。アーズカ酒はマカル酒よりもずっと強い酒だ。

「酒は本物だ。が、あんたは本物のソルドーさんなのですか？」

男は安楽椅子にもたれかかると、表情を変えずに自分の盃を干した。

「ゴルカンさん、あなたは、約四年前、このサンナ村に流れ着いた——一角犬と一緒に。その際、黒帽隊と一悶着あり、隊員二名が手傷を負った。が、明らかに黒帽隊の挑発行為に非があり、あなたはお咎めなし。今では村外れ、〈コムオゼットの闇森〉近くの掘っ立て小屋で暮らしている。月に何度か小人族の酒場で飲むか、頭のおかしな乞食予言師と会うほかは、完全に隠遁しているようなものだ」

私はアーズカ酒を飲み干した。

村の警護組織として存在しているはずの黒帽隊を事実上私物化し、村長や村役人も逆らうことができないという。サンナ村で一、二を争う大地主にして金貸しでもあるソルドー一族。

わずか四年弱のサンナ村での生活でも、その程度の知識は持っている——しかし、私について、それ以上の知識をソルドーは持っていた。

「なるほど、確かにあんたは本物ですね。私のような流れ者に何用ですか？」

ソルドーが瓶を掲げた。

私は遠慮せずに歩み寄り、盃に最高級のアーズカ酒を受けた。ソルドーの脇、壁際

に寄せてある椅子を引き寄せると、ソルドーに相對するように、腰掛けた。

「あなたは、かつてテジンの都の衛士隊にいたそうだな。しかも、隊長を務めていた」

「さすが、よくご存じだ。が、昔の話ですよ」

「四年を昔と言わん。ゴルカンさん、わしは、命を狙われているのだ」

私は、口元へ持っていきかけた盃を止めた。黙っていると、ソルドーは続けた。

「まず、十五日ほど前、従者の一人が殺された。もう夜半過ぎだった。不意に暗闇から何かが飛び出してきた……ズークは——殺された従者だが——酷い姿だった。可哀想なことをした。わしの代わりに死んだのだ。胸を何かで一突きされて」

わたしは断りも入れず、自分の盃に青い酒を注いだ。

「二度目は、その二日後だ。同じような刻限だった。今度はレミグスを連れていた。何者かが襲いかかってきた。レミグスは……右腕を失った。暗くて正体はわからなかった。失敗したことを悟り、すぐに消え去った……」

私は、アーズカ酒を一口、じつくりと味わった。

「失礼だが、いつたいなぜそんな刻限に外に出ていらしたんです？」

ソルドーは険しい眼で私と見たが、無言だった。

「ご婦人ですか？」

私の問いは的を射ていた。

ソルドーには、病身の妻がいた。何年も前から床に伏せつたままだという。

そんな妻を置いて、ソルドー自身は村の南東のはずれの妾宅に、三日と上げずに通っていた。妾宅に泊まることはほとんどなく、帰宅はほぼ夜半過ぎになる。妾宅を出るのに、半刻(約一時間)前後の差はあつても、何者かに襲撃を受けるのは、決まっただけの帰路だという。

「まったく理解できないのだが……いったいなぜ私をここに？ 私が下手人だと？」

はじめてソルドーの眼に笑みらしい笑みが浮かんだ。

「確かに、あなたは剣の腕が立つそうだ。食い詰めた乞食剣士が、誰かから金で雇われて……とわしも考えなかったこともない」

「残念ながら、私はそこまで落ちぶれてはいないつもりです。ならば、なぜ三人も黒帽隊を使って、毒矢で眠らせて運ぶ……などと面倒なことを？」

「あなたは、容易に引き受ける人間ではないと思っただからだ」

私は待った。その続きを半ば予期していたが。

「わしはな、ゴルカンさん。あなたに、わしの用心棒になつてもらいたいのだ」

オゼット

小人族のヘスクスは、一瞬眼を丸くすると、次の瞬間には弾けたように笑い出した。「ずいぶんと道草を食つていていると思つておつたが、これはこれは、たいへんな道草だつたじゃないか。で、引き受けたのかい？」

私は上衣の下から、ずしりと重い赤い革袋を取り出し、居酒屋へクトラシアへ飯台の上に置いた。それは飯台を揺らした。

相変わらず、客は少ない。旅人らしい二人連れが、奥の椅子に腰掛けて疲れた表情を見せているだけだった。

ヘスクスは眼を丸くし、危うく磨きかけの盃を落としそうになった。

「ここに金貨五十枚……とソルドーは言つていたがね。数えたわけじゃない」

私は眼の前のコルメ酒の盃を取り、飲み干した。やはり、私には安酒が合っている。

「そ、それが半金かい？」

「いや、手付け金だ。一日当たり、銀貨二枚。下手人を捕まえれば、金が五十。殺せば百だ。おい、ヘスクス、手が止まつてるじゃないか。代わりをくれ」

ヘスクスは大きなため息をついた。

「なんとなんと、ゴルカン、あんたも堕ちたもんだな」

「すでに経験済みだ。二度目はあまり痛くない」

テジンの都の衛士隊長という立場から、なかば追放されるようにして去り、各地を放浪したのを一度目と数えるならば、だが。

ヘスクスは、心なしか震える手でコルメ酒の盃を飯台に差し出し、小声で言った。

「ソルドーの家は代々、ろくでもないやり口でこの村を牛耳つてきた連中だ。あんたには、ほんとに失望したね」

「生きていくのにカネは必要だ」

「冗談がヘタクソだな。ゴルカン、あんたは、そんなタマじゃねえ。何か、深いワケありだろ。さあ、隠さずに教えな」

「客に対してずいぶんと無礼な店だな。では、河岸を変えるか」

私は懐から財布を取り出し、銀貨を一枚を飯台に置いた。コルメ酒二杯分には多すぎる額だが、今の私は貧乏ではない。止まり木から腰を浮かし始めると、咄嗟にヘスクスが腕を伸ばし、私の上衣を掴んだ。

「ちよつと待ちな、ゴルカン。いいかい、ソルドーの親方が何を言ったのか知らねえが、あの親父が、黒いお帽子の奴らの元締めだつてえことくらいは、いくら世間知らずのおまえさんでも知ってるだろう」

「少しは」

ヘスクスが身を乗り出した。私は無理矢理止まり木に座らされる格好になった。

「実はな、黒帽隊の奴らが、もう二人も死んでるんだ。しかも……どうだ、続きを聞きたいかい？」

ヘスクスは身を乗り出し、妙に白い歯を剥き出した。が、私は言った。

「聞くまでもないな。剣でも槍でもない、太い凶器で胸から背中まで刺し貫かれていた。それに、殺されたのは二人じゃない。三人だ。さらに一人が大怪我を負った。それに黒帽隊の連中が殺される前、ソルドーの家の従者が一人殺され、もう一人が手傷を負った」

ヘスクスはわざとらしく唇の端をゆがめ、声を潜めた。

「じゃあ、これはどうだい、ソルドーの親方には……女がいる。驚くなよ。孫ほども歳の離れた女を囲つてやがるんだ」

「ナツシマという名前だそうだな」

ナツシマの素性を、ソルドーは多く語らなかつた。私も訊かなかつた。四年ほど前——私がこの村に流れ着くのとほぼ同じ頃——にサンナ村に現れ、三年前、ソルドーはユイヌ川近くに一軒の家を建て、ナツシマを住まわせているという。

ナツシマの住む妾宅へ通つた帰り、ソルドーは襲われたのだ。

「つまらねえ野郎だ。じゃあ、ナツシマの前の夫のことも知ってるんだらうな」

「前の夫？ 以前、結婚していたのか？」

思わず私は身を乗り出した。ヘスクスがにやにやと相好を崩した。

「へえ、あんたでも知らねえことがあるのかい？」



「いったいナツシマの元の夫というのは、どこに住んでるんだ？」

「おっと、そいつを調べるために、たんまりと銭をもらったんじゃねえのかい？」

私は銀貨を一枚、飯台に置いた。

「この店にアーズカ酒なんてものは置いてないだろう。藍火酒をもらおうか。もつとも高いのを」

ヘスクスが、小さな杯に申し訳程度に藍火酒を注いで、飯台に置いた。

「ナツシマの元の夫というのは、何者なんだ？」

「これは噂だけ、だからそのつもりで聴きな。ナツシマを見初めたソルドーの手が付いた。言わば、そいつにとつては妻をソルドーに奪われた、つてえことになる」

「ソルドーは、そこまで色狂いなのか？」

「知らねえよ、あくまでも噂さ。いいかい、前の夫つてのは、呪技遣いだつてえんだ」

「呪技遣い？ サンナ村に呪技遣いがいたのか……」

私は藍火酒の杯の前に、三ヶ月前の事件を思い出していた。それを「事件」という言葉で表せるなら、だが。

呪技遣いの力、そして呪技遣いを騙る者の恐ろしさを私は身をもって体験した。我知らず、剣を身に引き寄せていた。

「どうした、臆病風に吹かれたかい？」

「ああ、とても」

私は藍火酒の杯をあおった。ほんの一口にも満たない量だった。しかも、お世辞にも上質とは言い難い。これで銀貨一枚をとるのは犯罪に等しい。

私は立ち上がり、剣を腰に帯びた。

「なんだい、もうお帰りかい？」

「いや、これから人に会う。そう酔つてもいられない」

「フピースなら、一刻（約二時間）も前に、しびれを切らして出ていったぜ」

フピースに渡すはずの木像のことを、すっかり忘れていた。が、村の裏通りを歩いていけば、いつかどこかでフピースには会えるだろう。

「なあ、ゴルカンよ。どうしてこんなくだらない仕事を請けた？」

ヘスクスの声が追いかけてきた。

「くだらないとは思わないが……さつきも言った。生きていくには、カネは必要だ」  
「はっ、自分を間抜けに見せたいのかもしれないねえが、やめときな」

私は飯台の向こうのヘスクスに向き直った。

「ゴルカン、おまえさんは、銭金で動く人間じゃねえ。おまえさんには、黒帽隊と同じ血が流れてるんじゃないのかい？」

「馬鹿馬鹿しい。私はソルドーの飼犬まで堕ちてはいない」

「黒帽隊のクズ連中は虫が好かねえ。が、まともな奴も、いないわけじゃねえ」

「何が言いたい？」

「それは、おまえさんがいちばんわかっているんじゃないか？」

ヘスクスは、必要以上に長く、めつたに使わないはずの腕を布で拭っていた。

私は〈クトラシア〉を出た。

その建物は、一見すると豪華な石造りの邸宅にしか見えなかった。周りを囲む塀は分厚く、そして高かった。さらにはその上には泥棒よけの鋭い鉄製の棘が無数に突き立っている。

一回りしてみたが、どこにも〈黒帽隊詰所〉の看板一つ出ていないのが奇妙だった。

かつて、黒帽隊とやり合った際、本部は村の役場近くにあったはずだ。この手の組織は、相手への威圧感を形にして表さないと気が済まない場合が多い。まるで隠れ家のようなこの建物には、違和感があった。

鋼鉄製の立派な正門へ戻ってみると、そこにはいつの間にか二つの人影があった。どこからか、見張っていたのだろう。

近寄ると、二人とも腰に剣を帯び、黒帽隊の制服を着ていた。その名の由来となった、筒型の黒い帽子もかぶっている。

「こんな刻限に何用だ？」

色白で、私よりやや若い男だった。人を怒鳴りつけ、見下すのに慣れた人間特有の言葉づかいだ。

私が懐に手を入れると、男は剣の柄に手をやった。

「そういきり立つな。ソルドーから、書き付けをもらっている」

私は、油紙に包んだ書き付けを取り出し、男は間髪入れずに引ったくった。しばしそれに眼を通してから、男は言った。

「入れ。ただし、剣は預からせてもらう」

私は言われたとおり、もう一人の男に剣を渡した。男が身じろぎするのがわかった。「ほう、あんなだったか、お仲間二人と私を待ち伏せしたのは」

男は答えなかったが、額に薄く汗が光っていた。まだ二十歳前後だろう。

「しかし、パデスウの吹き矢を使うとはいただけないな。まだ頭が痛むよ」

私は、二人に押されるように、私は石造りの建物に入った。

石造りの建物は、扉も立派だった。その奥には、絨毯を敷かれた長い廊下があった。まるで、ソルドーの屋敷のようだった。

すぐさま、右手の扉が開いた。

現れたのは、私より頭二つ分は長身で、顎髭をたくわえた大男だった。黒帽隊の制服を着ている。制服には塵ひとつ落ちていない。歳の頃は、三十代半ばだろうか。

「ゴルカン。入れ」

腹の底に響く声が、各地の剣に見とれていた私を我に返らせた。

私が吹き矢で打たれたとき、ソルドーの脇に立っていた大男だと気づいた。

私は大男のあとに続いて、部屋に入った。机が一つ。椅子が三つ、という質素な部屋だったが、壁一面に、様々な剣が飾られていた。私も各地の剣を見たことはある——剣と剣を交えたことも——まったく見知らぬ湾曲した、とても剣とは思えぬ金属片も飾られていた。

「ずいぶん遅かったな」

「あんなたちの夜回りが終わるのを待っていた」

大男からは酒の匂いがした。私よりも酔っているようだ。

「なぜ義父が、おまえごときよそ者呼んだのか、理解できん」

男は、机の引き出しから酒の小瓶を取り出し、そのまま口を付けて飲んだ。私には薦めなかった——薦められても、断ったが。

「あんなたち黒帽隊が頼りない、ということだろう」

男は、ソルドーの娘婿、ワーガスだった。黒帽隊内の実力者だという。

「貴様……何か罪状作って、牢にぶち込んでやってもいいんだぞ」

「ほう、それをあんたの義理の親父さんが喜ぶかね」

「なんとでも理由はつけられる。黒帽隊をナメないほうがいいぞ」

「まるで路地裏のごろつきのような言いぐさだな……」

ワーガスはもう一度、酒をあおった。決して美味そうではなかった。

「さて、怪我をした隊員がここにいるそうじゃないか。会わせてもらおう」

「断ったら？」

「ソルドーに伝えるまでさ」

ワーガスは立ち上がった。掴みかかってくるのか、と一瞬身構えたが、短く「来い」

と低い声で言った。

扉を開けると、すでに先程の二人の黒帽隊員がいた。三人に囲まれ、私は廊下の奥の階段に向かった。

今この瞬間、この連中に殺されても、ソルドーをはじめ誰にも真相を知られることはないな、と思った。

が、彼らは私を殺さなかった。

三階の一番奥の部屋が、負傷した黒帽隊員、カゼーンのいる部屋だった。

まったく無味乾燥な部屋だった。あらかじめ、病人や負傷者を収容するために用意された部屋ではないようだ。

黒い幕を引かれた窓の脇に、寝台があった。顔色の悪い若い男が横たわっている。腹に白い包帯が巻かれているが、右脇腹からは黒く血がにじんでいた。

私たちの姿を見ると、男はすぐに上半身を起こそうとした。その両眼に見えるのは、上官への敬意でも信頼でもなく、恐怖のいろだった。

「寝たままがいい」

私はワーガスよりも先に言った。

「二人だけにしてくれないかね？」

「貴様、調子に乗り過ぎるなよ」

ワーガスは捨て台詞を残し、部屋から出て行った。

私は、おどおどと視線を泳がすカゼーンに向かって名乗り、ソルドーの用心棒にな

つた経緯を話した。

「襲われたとき、あなたは相手を見ていないんだね」

「夜道は暗かったですし……足音も聞こえませんでした」

「が、あなたは名誉の負傷をした」

カゼーンは、不意に眼を閉じた。ずいぶん幼く見えた。まだ十八くらいであろうか？

「見えない敵は、恐ろしいものだ。あなたは勇敢だった……はずだ」

「副長には、言わないでもらえますか……」

かすかに聞こえる小声を、カゼーンは漏らした。私は、それを待つていた。

「副長とは、ワーガスだね。ああ、言わない。憶したあなたが剣を抜くこともできず、

逃げようとしたことは」

カゼーンは、はつと眼を見開いた。凶星だった。

「それを責めるために夜中にここまで来たわけじゃない。あなたは、何も見えず、聞

こえなかった、と言ったね。それ以外、何かを感じなかったのか？」

「いえ……突然、一緒に警護していたハッドさんの体が吹っ飛んで、ソルドー様にぶ

つかりました。ソルドー様は倒れて気を失い……ハッドさんは……ああ！」

カゼーンは両手で髪をかきむしった。

「胸に穴が開いていた、と聞いているが？」

「そうです……あんなこと、信じられない。まるで……呪技のようでした」

「呪技か……凶器は見えていないんだね」

「そんな余裕、ありませんでした。次の瞬間に、腹に衝撃があつて……後のことは覚えて

ません」

「あなたの予想でいい、凶器は何だと思う？」

「わ、わかりません……あんな、大きな穴が胸の真ん中に……まるで、大木で作った

槍のようでした。そんな得物を音もなく振り回すことなど無理です。あれは、きつと

呪技です！ 下手人は呪技遣いです！」

「屍体を見られるといいんだが」

「もう、埋葬されています……」

「だろうな。まさか、墓を掘り起こしてはくれまい。あなたの証言だけが頼りなんだ。

ほんとうに、何も感じなかったのか？ かすかな音でもいい。気配でもいい。どんなつまらないことでも、覚えていないか？」

しばし、カゼーンは眼を閉じた。

「匂い……」

「匂い？ どんな匂いだね？」

「まるで……古井戸か、沼のような……」

「現場の近くに、そんなものはなかったはずだが」

「ありません。でも……そんな、生臭いような、汚泥のような匂いを感じたような気がするんです……それに、後で医者から聞きましたが、傷の周りにねばねばした液体が付着していたそうです」

「液体？ あんたの様子を見ると、毒ではないようだ。とても参考になったよ」

私は寝台から離れ、扉に向かった。背後から、カゼーンの震える小声が聞こえた。

「僕は……黒帽隊を辞めます」

「逃げたことを恥じることはない。お陰であんたの命は助かった。それに、あんたから私は話を聴けた」

「僕には黒帽隊は向いていない。僕は……百姓の息子です。親父は、村の端で、ソルドー様の下で小作人として働いています。僕は……村のために黒帽隊に入ったのに、隊長の命令を無視して副長が——」

カゼーンは口ごもった。私は寝台のカゼーンを振り向いた。

「ワーガスは、ソルドーの娘婿だ。ソルドーの飼い犬になった黒帽隊に失望するのも無理はない」

カゼーンは、枕に頭を沈め、天井を見やった。

「家族で暮らせるこの村を守るつもりだったんです。なのに、副長は……」

「そのワーガスの手足となって、甘い汁を吸っていたことは、忘れるべきじゃない。自分を被害者だと思ったら、大間違いだ。私にも同じような経験がある。私も、あんたも、誰かを傷つけている。ならば、クソみたいな人生を生き続けるしかないんだ」

私は口をつぐみ、扉を開けた。

——恥ずかしい奴だ。

カゼーンのことではない。私自身を恥じた。

かつてテジンの衛士だったころ、綺麗なものも醜いものも、多くを見た。多くを身をもって体験した。私自身が、自らの力を私事に利用した経験もある。私の手も、汚れている。血に染まってすらいる。

「彼をどうするつもりだ？」

部屋を出ると、腕組みをし、噛み煙草をくちやくちやと噛み締めているワーガスに言った。その両脇に、黒帽隊員が控えている。

「貴様の知ったことじゃない」

私は一歩ワーガスに踏み出した。

「これは治療でも何でもない。監禁じゃないか」

「用が済んだのなら、とつとと帰ってもらおう」

ワーガスの脇の二人が私の両腕を掴もうとした。が、私は一瞬早く、ワーガスの胸元を掴んでいた。

「絶対に、カゼーンを殺すな。手下の不手際を隠蔽したいだろうが、やめておけ。もしも彼が死んだら、あんたたちはとても面倒なことになる」

ワーガスは無言のまま、二人の隊員に顎で命じた。二人は素早く私の二の腕を強く握り私をワーガスから引き離れた。

二人の隊員は、私を階段を引きずり降ろし、玄関から外へ放り出した。

急激に寒気が私の全身を包んだ。

ゆつくりと、ワーガスの影が近づいてきた。立ち上がった私に、ワーガスは私の剣を突き出した。私は黙って受け取り、腰に帯びた。

「二度とその面を見せるな。次は、斬り捨てるぞ」

ワーガスが独り言のようにつぶやき、噛み煙草を吐き出した。

「ひとつ訊きたい。あんたは、なぜ黒帽隊に入った？」

ワーガスは答えず、くるり、と私に背を向けて、部下の二人とともに邸宅のなかに姿を消した。

不意に胸の上に圧迫感を覚えた。続いて、べつたりと濡れたものが私の顎の輪郭に

沿って移動する――

目覚めた。一刻半（約三時間）も眠れただろうか、寝台の私の上に、一角犬のグンが上半身を乗せ、私の顔面を、彼の唾液で洗おうとしている。

「待て、起きるから勘弁してくれ」

寝台から降りると、激しい頭痛が襲ってきた。明け方まで飲みたくもない酒を飲んでいたのだから、宿酔も当然だ。うめき声を上げながら、玄関脇の水瓶からぬるい水をすくって顔を洗うと、扉が遠慮気味に四回叩かれた。

グンは、尻尾を振って私を見上げている。どうやら、ご親切にも来客を知らせてくれたらしい。

私は腕で顔を拭いた。寝台の脇に剣が立てかけてあるのを確認したが、あえて剣は取らずに扉に近づいた。

「誰だね？ こんな朝から行商人はお断りだ」

「ここは……ゴルカンさんのお宅ですね」

若い娘の声だった。私はもう一度剣を見やり、そして自分の身なりに眼をやった。汗染みた下着姿だ。髪は寝癖で逆立っており、昨夜の酒の臭気を放っている。

「そうだが……何の用だね？」

「大事なお願いがあります、ご迷惑とは思いましたが、お話を聴いていただけませんか……」

私は不承不承扉を開けた。

朝日がまぶしすぎる。逆光のなか、細い肩が見えた。紫がかった外套。身なりは高価なものをまとっている。

二、三步背後に、従者と思しき初老の小人族オゼットの女が控えていた。

「ソルドーの許可はもらっているのかね、ダーミアさん」

私は少女に言った。

私は、昨夜という時間を無駄に使わなかった。単に貧乏性なのだが。

ワーガス指揮下の黒帽隊詰所を出たあと、〈へなか道〉沿いの比較的上等な居酒屋や、以前、もめ事を解決して貸しを作ったことのある娼館などをはしごして、ソルドー一族について訊ねて回ったのだ。



金に不自由しなかったが、やはり飲み過ぎた。

ソルドーの病身の妻はミルー。原因不明の病で、もう六年も寝たきりの生活をしているという。二人の間には二人の子どもがおり、長男はデイルス。特に何の仕事をしているのか、誰も知らなかった。無論、ソルドーの一族ほどの財産があれば、私のように明日の飯の心配などせずに、毎日を暮らすことができるだろうが。デイルスと妻、ジェノーのあいだの娘——つまりソルドーの孫が、今、眼の前に立っているダーミア。長女、ミレイの夫が、昨夜会った黒帽隊のワーガスだ。

「入るかい？ とりあえず、私は茶を飲みたい」

断るかと思つたが、ダーミアはためらうことなくなずいた。しかし、その両眼はどこかうつろで、視点が定まつていないように見えた。

火を起こし、小鍋で湯を沸かしながら、私は訊ねた。

「お願いというのは？ 私はすでに、きみのお祖父さんの『お願い』を請け、手付け金も受け取っている。結構、使つてしまつたけれどね」

ダーミアは、大人しく椅子に腰を掛けていた。少々姿勢が正しすぎるのではないか、というほどまつすぐに腰掛け、私を見ていた。一角犬のグンが、いつの間にか立ち上がり、ダーミアをじつと見ている。尻尾を下げている。かすかに喉の奥でうなるのが聞こえた。

「グン、大人しくしろ」

珍しく私の命令に従わず、グンはゆつくりとダーミアをにらむかのように、その周囲を回り、うなり続けた。

「ワーガス叔父様が——」

ダーミアの視界には、グンの姿が入っていないかのようにだった。

小鍋の湯が沸き、ペン茶の茶葉を入れた土瓶に注ぎ入れた。

「叔父さんとは昨日、お会いした。黒帽隊でご活躍のようだね。お茶に黒糖は？」

「いえ、結構です」

ダーミアはきつぱりと言い切つた。その視線は、どこか中空を見つめていた——強い力で。私は腕に熱いペン茶を注いで、差し出した。

「叔父は……とても優しい人です」

とてもそうは思えなかったが、私はうなずいた。苦いペン茶を口に含んだ。

「ワーガス叔父様は、命を狙われています」

「ほう？ お祖父さんだけでなく？」

ダーミアはかぶりを振った。

「ほんとうに命を狙われているのは、ワーガス叔父様なんです」

「ソルドー……お祖父さんではない、と？ なぜそう思うんだ？」

「わたし、自然にお屋敷で黒帽隊の人たちとお喋りしたりする機会があります。街で出会っても、わたしに挨拶してくれる隊員さんもいます。けれど、ある日、聞いてしまったんです……」

一語一語、確かめるように、ダーミアは言った。

「あれは……三日ほど前でした。わたし、買い物に出かけたのです」

そこで、数人の黒帽隊員を見かけたという。普段ならば頭を下げて挨拶する隊員たちだったが、彼らは違った。ダーミアの姿を見かけるや否や、動揺のいろを見せた。そして、挨拶もそこそこに立ち去ったという。

「それだけで、叔父さんが狙われているというのには、あまりに早計ではないのかな」「彼らが話しているのを、小耳に挟んだんです。はつきりと聞こえました。『副長に早く消えてもらわねば』と」

「ほんとうに『消えてもらう』と言ったのかね？」

「間違いありません。実際、その次の夜、祖父は襲われて、護衛の方にも怪我人が出ました」

「その話をワーガス……叔父さんには？」

少女はかぶりを振った。

「ソルドーに——お祖父さんに話せば、もっとも早いと思うが」

「話しました。けれど、聞く耳を持つてくれませんでした。祖父は……黒帽隊を利用していません。あんな女のために……」

少女らしい潔癖さであろうか、その語尾は尻すぼみになった。

「エルムス、外で待っていないさい」

不意にダーミアは小人族の女に顔を向けた。人に命令することに慣れた口調だった。

エルムスと呼ばれた女もまた、命令されることに慣れている様子だった。彼女は、ダーミアと私に不自然なほど深くお辞儀をすると、扉を開けて私の小屋から出ていった。それを見計らったように、ダーミアは立ち上がり、一步、私に近づいた。

「お願いできるのはゴルカンさんだけです。叔父様を助けて下さい。叔父様と一緒に、この村に隠れている悪徳を、暴いて下さい」

ダーミアは、不意に外套を脱ぎ捨てた。

この季節にはやや寒そうな半袖の上衣を着ていた。か細く白い腕が痛々しいほどだった。ダーミアは、私に歩み寄ってきた。その両の爪先は私の爪先と触れるほどの近さだった。息づかいすら私の首筋に感じられた。その足元で、一角犬グンがうなり声を上げている。

「どうか、お力をお貸し下さい。ですが、わたしには、祖父のように払えるものがありません。ですから、わたしを——」

ダーミアが上衣の裾の紐を解き始めた。

ゆつくりと、ダーミアはその黒目がちの瞳を向けた。私は、はじめてたじろいだ。少女の大胆な行動にはなく、その瞳の奥の昏さに。パデスウの吹き矢で射られたときより大きな痛みをどこかに覚えた。

グンがひと声吼えた。我に返った。床から外套を拾い上げ、ダーミアの肩に掛けた。

「わかった。考えておく。成功報酬についても」

ダーミアは、まったく表情を変えないことなく、外套を素早く身に着けた。

「ゴルカンさん、わたし、信じていますから」

ダーミアは言った。そして、もう一度私に昏い双眸を向けた。私の返答を待たず、扉が開き、足早に小屋から出て行った。

扉が閉まった。彼女と従者のエルムスの足音が遠ざかっていった。

グンは、しばらく扉の向こうに耳を傾けていた。

私の背中には冷たい汗が流れていた。

日差しは強かった。太陽の日差しは宿酔の頭には痛いほどだ。私の小屋からへなか道へ出て、さらに南西へ進み、結局、一刻ほども歩いた。

太陽は目一杯の力で照りつけている。ようやく、朝飯を食っていないかったことを思  
い出した。結局、空きつ腹を抱えたまま、村の南の境まで歩いた。村境のユイヌ川の  
堤に沿って並ぶ上等とは言えぬ飯屋の一軒に入り、不味いエルル麦の粥を無理矢理胃  
の腑へ流し込んだが、胃が落ち着かない。酒の飲み過ぎだろう。

アツカ豆の畑が広がり、ところどころに農家が見えた。サンナ村の南東のはずれ―  
―小さな林が盛り上がり、その鮮やかな緑色が、日差して痛む眼を和ませる。

アオマツの林に隠れるようにして、ナツシマの住む日干し煉瓦造りの館はあった。  
私は、アオマツに隠れるようにして屋敷の周囲を一回りした。屋敷内の様子はうか  
がえなかった。

半分ほど回り、自らが愚かしく思えてきた。確かにソルドーから金は受け取った。  
そして、真つ昼間から他人の妾宅の周囲をうろついている。自己嫌悪を覚えた。

グンの待つ小屋に戻ろうとしたときだった。

ちようど、日干し煉瓦の屋敷の南東側。正門とはまったく反対側で、人声を聴いた。

反射的に辺りを見回し、ユイヌ川の畔の葦の茂みに身を隠し、ひざまずいた。

男と女の声だった。

男の声は激した様子だった。女のなだめるような声が漏れ聞こえてくる。そつと葦  
の隙間から覗くと、男の後ろ姿が見えた。旅人のような人でたぢだった。埃で汚れた  
長衣を着ている。少なくとも、この村の住人ではない。女は逆に、都から取り寄せた  
かのような、小綺麗な衣服を身にまとっていた。漆黒の長い髪、ほとんど化粧をして  
いないようだったが、私のいる場所からでも、かなりの美人であることは見て取れた。  
立ち居振る舞いにも、余裕がある。

ソルドーの愛人、ナツシマであることを確信した。

すると、男のほうは、ヘスクスが言ったナツシマの前の夫だろうか？ 明らかに二  
人は、今日会ったばかり、という様子ではない。

そのうち、女のほうが、男に向かって何ごとか一喝した。遠目にも明らかに、男は  
気圧されていた。

ほどなくして、男のほうは、ややうなだれた様子で私が隠れているのとは反対のほ  
う、貧しい長屋が並ぶ北へ向かった。

私はゆつくりと立ち上がった。葦の茂みから身を出し、男を追いつめた。2イコル（約六〇メートル）ほど距離を取った。

が、背後に気配を感じた。振り向いた。

「盗み聞きが趣味なの？ 黒帽隊には見えないけど」

いつの間にか、背後に女が立っていた。ナツシマだった。近くで見ると、目元にやや陰のある美人だった。尖った顎。細く藍色の眼で値踏みされるように見られると、やや寒気のようなものを感じた。

「あなたなのね、人喰い鬼の棲む森で暮らしてる酔狂な流れ者っていうのは」

「ずいぶんと情報が早いな。しかも正確だ。わざわざご注進に及ぶ忠実な犬でも飼っているのかな」

ナツシマは鼻で笑った。

「あたしの何を知りたいの？」

「単刀直入だね。なら、私も正直に答えよう。あなたの愛人、ソルドーの警護を仰せつかった。ソルドーが、愛人のあなたの家に通う護衛をすることになったんだ。護衛すべき依頼者の通る道筋を下調べするのは当然だ」

もう一度、ナツシマは鼻で笑った。

「それはそれは、ご苦労なこと。でも、テジンの都で衛士隊長まで務めたお人が、ずいぶんと落ちぶれたものね」

私は眼を細めた。

「どうやら、あなたの飼っている犬は、ずいぶんと有能な鼻を持っているようだ」

ナツシマは、腕を組み、じつと私を見据えた。

「三ヶ月前——水晶山の大崩壊。蛇神の配下の空駆ける大蛇……。地上界を破壊しかねない大事件に関わったあなたが、ずいぶんと安い仕事を請け負ったこと」

私は、できるだけ表情を変えないように言った。

「あなたは、どこまで知っているんだ？」

ナツシマは、肩を震わせて笑った。

「知りたい？ あなたの飼っている犬は、とても優秀なの。けれど、その犬は、あたしの屋敷までは、入れない。けれど——」

ナツシマは、私に近づき、片手を私の胸にあてた。

「あなただつたら、入れる。どう、元衛士隊長さん？」

挑むような視線で、ナツシマは言った。

「喉が渴いているんだ。水を一杯もらおうか」

ナツシマの口元に笑みが広がった——が、その両眼は笑っていないかった。

私を通された部屋は、意外にも質素だった。花や絵といった装飾品は何ひとつなかった。そして部屋の中央には、装飾のまったく施されていない小机——私の眼にも、それは北方の職人の作った高価なものだとわかった。

ナツシマという女の性格が、この部屋に集約されているようだった。

「さ、どうぞ」

ナツシマが歩み寄って来た。手にした硝子の器に入っているのは、明らかに水ではなかった——褐色の液体。

「陽の照っているうちには飲まない、なんていう野暮天じゃないわよね、あなたは」  
私は器を受け取った。飲みたい気分ではなかったが、黙って、ナツシマに向かつて器を掲げた。

ナツシマは、同様に器を掲げ、立ったまま一気に飲み干した。

私も口を付けた。上質の藍火酒だった。ヘクトラシアでは決して飲めない代物だ。

私は、小机の脇の長椅子に腰掛けた。これもまた北方の職人の手によるものだ。

「さつき、あんたと館の外で話していたのは、あんたの元夫かね？」

私は小机の上に器を置いた。

「せっかちな人ね。女には嫌われるわよ」

「痛いほどわかっている。それで、質問の答えは？」

ナツシマは柵から瓶を取ると、二杯目の藍火酒を硝子の器に注いだ。

「誰から聴いたの？」

「私の飼っている犬は一角犬でね、その方面の鼻は利かないんだ」

「誰であれ、アテにならないネタ元ね」

「どういうことだ？」

「夫じゃない。あたしの兄よ。ついで行っておくと、名前はリンゼン」

「兄妹？ そのお兄さんは呪技遣いだと聞いたが、ほんとうなのか？ そうは見えなかったが」

ナツシマはまたも一気に藍火酒を飲み干した。

「呪技遣い……のようなもの。まだ聞きたい？」

悪びれることなくナツシマは答えた。私は藍火酒をなめた。

「無論だ」

「あたしと兄は、南の国のサグウって小さな村で育った。ひどいところだった。タンダト川の支流近くで、辺り一面は、じめじめした湿地。セイタカムラサキアシばかりが生い茂ってた。地味は悪くて、狭い畑でやつとナリイ麦が収穫できるだけ。あんなもの、ハシブト鴨の餌にかなりやしない。あたしたちの家は、その村唯一の呪技遣いだった。田舎村の呪技遣いがどんな扱いか、想像がつくでしょ？ 女のあたしは呪技遣いにはなれない。物心ついたときから、村を出ることしか考えていなかった」

ナツシマは小机に直接腰を下ろした。

「兄も、呪技遣いの修行に嫌気が差していた。あたしたちは、サグウ村ではぐれた、似たもの同士だったのよ……」

「それで、あんたたちは村を出た、と？」

ナツシマは鼻で笑った。すでに器が空になっている。

「そんなに簡単なことじゃなかったけれどね。あたしが十五、兄が十七のとき、二人して逃げ出した……」

私は器に残った藍火酒を一気にあおった。

「呪技遣いは、十八歳で最後の修行をしなければならぬはずだ」

「詳しいのね。さすが、元衛士隊長さん。そのとおり。だから、兄は真の呪技遣いではないの」

ナツシマは、藍火酒を私の器に注いだ。次いで、自らの器に注いで、一気に半分ほど飲み干した。明らかに飲み過ぎだ。

「あなたにはわからないでしょうね。あたしたちは、彷徨った。南の国の田舎村から、西の国の端まで。いろんなことを見たわ。いろんなことを体験した……あーあ、つま

んないことを話したわね」

ナツシマはすでに呂律が回っていないかった。私は、器を小机に置いた。

「つまらないとは思わないな。あんたとリンゼンは、ずっと苦楽をともにした兄妹なんだろう？　しかし、この村に来て、あんたはソルドーのものになった。兄さんはもう邪魔者というわけだ」

ナツシマは私の器に藍火酒を注いだ。私は手を付けなかった。

「しかしあんたは、今でもリンゼンと会っている」

ナツシマの眼は泳いでいた。

「お金。ほかにどんな理由があるっていうの？」

「リンゼンは呪技遣いだ。そんな兄と会っていると知ったら、ソルドーは黙っちゃいないだろう。黒帽隊に消されてもおかしくない。あまりに危険すぎないかね？」

「そんなヘマはしない、兄は」

ナツシマは立ち上がった。ややふらついたが、その言葉ははつきりしていた。

彼女は藍火酒の瓶を棚に戻した。棚に両手を付くと大きな嘆息とともに言った。

「滑稽ね。男に飼われたふりをしている女。そして、そんな男と女を、金目当てで守ろうという男」

私も藍火酒の残った器を置いたまま、立ち上がった。もはや、彼女から聴くべきこととはない。

「ああ、たいへん滑稽だ。笑えないがね」

そのとき、ナツシマの体が揺らいだ。反射的に立ち上がり、その両肩を支えた。さきほどまで私が腰掛けていた長椅子に座らせた。

「表門から出ていくわけにもいくまい。裏口から出るよ。どう行ったらいい？」

ナツシマは小机に突っ伏したまま、ぞんざいに扉を指した。

「そこを出て右、次の廊下を左にまっすぐ行けば、突き当たりに小さな扉があるわ。鍵はかけなくていい。どうせ誰も来やしないんだから」

すぐにナツシマは、再び小机に突っ伏し、寝息を立て始めた。

私は彼女の言ったとおりに、意外に質素な廊下を進み、裏口の扉を開けた。扉は私の肩ほどの高さしかなかった。



背の高いミズヤナギの木々に隠れ、外部からはほぼ見えない位置に扉はあった。ここからやや離れたところで、ナツシマは兄のリンゼンと会っていた。

何を探しているのか私自身わからなかった。が、先にそれが私の視界に飛び込んできた。

太陽光を虹色に反射する濡れた砂利——歩み寄って拾い上げた。濡れているのではない。何か、どろりとした粘液様のものがこぼれていた。見ると、数ヶ所に、同様に虹色に光を反射する砂利が眼に入った。

ひとつ拾い上げて顔に近づけたが、すぐさま取り落としそうになった。汚泥のような、あるいは沼のような臭気が鼻孔を突いた。

ちょうどナツシマとリンゼンが話していた辺りに、粘液状のものがしたたっている。私は、すでにかなりほつれている上衣の裾を引き裂き、粘液のこびりついた小石を一つ包み、懐に収めた。

職人の多く住む〈金釘通り〉の西に面した料理屋〈彩雲亭〉さいうんていは、まだ開店していなかった。昼食時にはまだ少し早い刻限だ。

が、店の前に水を撒いていた少女は、すぐ私に気づき、満面の笑顔で駆け寄ってきた。赤い髪を後ろで束ねた、碧色の瞳の少女の名はフィエル。彼女は、サンナ村の生まれだったが、三ヶ月前の事件で家族を失った。そして、ひょんなことから私と知り合った。私にはサンナ村での知己は少ない。信頼できる数少ない〈彩雲亭〉の女将おかみサロアに頼み込んだ。サロアは、私より二十ほど年上だが、昔、幼い娘を水の事故で亡くし、さらに十数年前には夫に先立たれ、たった一人で〈彩雲亭〉を切り盛りしていた。

サロアは、まだ十五歳で天涯孤独となったフィエルを喜んで引き取った。今、フィエルは〈彩雲亭〉で働きながら暮らしている。

「ゴルカンさん、すぐ開けますね」

「いや、急ぎの用じゃないんだ。ちょっと女将さんに訊きたいことがあってね」

フィエルはてきぱきと扉を開け、布巾で飯台を拭くと、半ば強引に私を座らせた。

そして、奥の厨房に向かつて、

「おばさん、ゴルカンさんだよ！」

と明るく大きな声を上げた。

ほとんど間を置かず、丸々と太った体を揺らしながら、サロアが現れた。

「わたし、お茶淹れてくるね」

フィエルは、まるで小動物のように、素早く厨房へと姿を消した。

「よく働いているようですね」

するとサロアは、大きな口を開けて笑い出した。

「何言ってるのさ。あんたが来たからだよ。ずいぶんとご無沙汰だったじゃないか」

「こう見えても、いろいろと忙しいんですよ」

「まだ、インチキ予言師の手伝いなんかしてるのかい？ あんたは、とつとと身を固めたほうがいい。いるんだろ、いい人が都に」

「フィエルが言ったのですか？」

「あの娘は、あんたがテジンの都でいい人と一緒になつて、サンナ村には戻つて来ないと思つてたらしいよ」

「なんとね」

そこへ、フィエルが盆の上に二つの湯呑みを載せて現れた。私は礼を言つて受け取つた。よく冷えたサツキ茶だった。フィエルはそそくさと、厨房へと姿を消した。きつと、私とサロアの会話を耳に挟んでいたのだろう。

「実は、お訊きしたいことがあるんですよ」

「何さ、改まつて」

「この南、ユイヌ川とウエスルー川の分かれる辺りに、立派な館があることをご存知ですか？」

急に、サロアがドクセンダングサを飲み込んだかのように、眉間に皺を寄せた。

「はっ！ 大金持ちのお婆さんが住んでるんだろ。この辺りの者はみんな知ってるよ」

「そのお婆さん、ナツシマについて、知つてることを教えて欲しいんです」

「なんだい、ゴルカンともあろうお人が、他人様のお婆に横赤褌かい？ よしときな」

「ついさつき、ナツシマ本人に会つてきたところですよ」

「おやおや、ずいぶんと手が早いんだねえ」

そこでサロアは声を低くした。

「フィエルが聞いたら、あの娘、ほんとに泣いちゃうよ」

私はサツキ茶を飲み干した。

「冗談じゃない。私はナツシマを囲っているソルドーに用心棒として雇われたんですよ」

私はこれまでの経緯をサロアに話した。

少しの間、サロアは飯台の向こうで腕組みをして黙り込んだ。

「ふうん、でも、あんたが知らないことを一つだけ教えてあげようか」

「ぜひ聴かせて下さい」

サロアもサツキ茶を飲み干し、厨房のほうを一瞥した。おそらく、そこではフィエルが聞き耳を立てているのだろう。

「ソルドーの本妻のミルーさんはね、哀しい人なんだよ。あの人は若いうちにソルドーの手が付いて……結婚だって、ミルーさんの本意じゃなかったと思うね。それに、結婚してほどなくして、何の因果かミリド病に罹っちまってね」

サロアは口ごもり、決して高くはない天井を見上げた。

「ソルドーには、ダーミアという孫娘がいますね。その父親は……？」

「ああ、デイルスさんね。あの人だって、可哀想さ」

サロアは、遠くを見つめるようにして、語り始めた。

ソルドーの長男であるデイルスは妻のジェノーとのあいだに娘のダーミアをもうけたが、今では働きもせず、賭場や〈なか道〉裏の淫売宿に入り浸っているという。相手もソルドーの長男から金を取ることはできないという。

「小耳に挟んだ噂ですが、ソルドーではなく、ほんとうに狙われているのはワーガスだということです。ワーガスは恨みを買うような人間なのですか？」

「そりゃあんだ、黒帽隊には誰だって恨みを持っているさ」

「黒帽隊は、隊長のギンセル派と副長のワーガス派に割れているらしい……」

「あたしや、そういう難しいことは知らないけどね、ギンセルってのかい？ 隊長は、とてもまっとうなお人だよ」

そのとき、いつの間にか私のすぐそばにフィエルが立っているのに気づいた。

「お茶のおかわりはいかがですか？」

「ああ、頂戴しよう」

「そうそう、この娘がうちに来るとき、力になってくれたのが隊長だったわね」

「そうか、思い出した。背が高く、銀髪で髭面の男でしたね」

フィエルは私の湯呑みに茶を注ぎながら、口を挟んだ。

「でも、ゴルカンさんがいなかったら、わたしは村に帰って来られなかったし、生きてなかったかもしれないし……わたしのほんとうの恩人はゴルカンさん……また何か危険なことに巻き込まれているんですか？」

私はサツキ茶を飲み干し、笑みを作った。成功したとは言えなかったが。

「大丈夫だよ。今度は、グンを連れて来よう」

「ほんとう？」

すかさず女将のサロアが口を挟んだ。

「冗談言っちゃいけないよ。あたしゃ、あんな化け物苦手なんだよ。勘弁してくれ」  
フィエルが、声を上げて笑いながら厨房へ湯呑みを下げに行った。以前は、あんなに明るく笑えなかったはずだ。

礼を言つて〈彩雲亭〉を出ようとすると、サロアが顔を、ぐい、と近づけてきた。

「あんた、フィエルを泣かせるんじゃないよ」

私は曖昧にうなずき、逃げるように〈彩雲亭〉を出た。

その夜、早速ソルドーから呼び出しがあった。若い黒帽隊員が、剣の柄から手を離すことなく、私の小屋へと迎えに来た。彼の手は小刻みに震えていた。

空には、上弦よりやや膨らんだ緑月が出ていた。

私は彼とともに〈へなか道〉まで出た。そこにはミツユビカケトカゲの曳く蟲車が停まっていた。扉が開き、ソルドーが上半身だけ出し、私に向かってうなずいた。が、私を乗せてくれるわけではなさそうだった。

私は蟲車の背後からついて行くことになった。蟲車は先頭に二人、横に一人、黒帽隊と思しき男たちに囲まれていた。私よりさらに一イコル（約三十メートル）ほど離れて、自称予言師のフピースが、一角犬グンとともに追っているはずだ——安酒で酔

いつぶれていなければ、だが。

蟲車は〈へなか道〉から南に折れ、路地をいくつか曲がり、農地に出た。そして、私  
が昼に通った道に入った。

そのときだった。匂いを感じた。

「くるま蟲車を停めろ」

私は御者に命じた。

遅かった。

生臭い「何か」が空を切った。次の瞬間、蟲車の前にいたはずの黒帽隊の男の姿が  
消えていた。正確には、半イコルほども飛ばされていた。

剣を抜いた。地面に這うような姿勢になった。

再び、生臭い風。悲鳴——また一人が犠牲になった。

私は地面を這いずり、蟲車の扉を開け、ソルドーに怒鳴った。

「降りて伏せるんだ！」

ソルドーの上衣を掴み、引きずり出した。その一瞬後、風がよぎった。蟲車の扉が  
粉々に砕け散った。同時に、ぬるつとした液体が私の顔にかかった。

ソルドーは魂でも抜けたかのように、茫然としゃがみ込んでいた。

「伏せて、車の下へ。絶対に動くんじゃない！」

私は無理矢理ソルドーを蟲車の下へ押し込んだ。ソルドーは恐慌状態で、意味不明  
の言葉をわめき、暴れ出した。私は左の拳をソルドーの脾臓に叩き込んだ。ようやく  
ソルドーは静かになった。

その瞬間に、風。

剣を振り上げた。一瞬遅れた。左肩に激痛。仰向けに倒れた。が、剣はかろうじて  
握ったままだった。

今まで体験したことのない痛みだった。槍ではない。尋常の武器ではない。傷口か  
ら、じわじわと痺れが体に広がっていくのを感じた。

「フピース！ グン！」

喉の奥から声を絞り出した。

蟲車と黒帽隊隊員の持っていた手提げ灯はすでに消えていた。何人がやられたのか、

見当も付かない。

緑月の明かりだけでは、ほとんど何も見えなかった。

眼に頼れなければ、鼻に頼るのみだ。

歯を食いしぼる。痛みを忘れるよう、自分に命令する。さっきの「風」は夢だ。俺の左腕は無事だ。

ゆっくりと立ち上がる。ぐらぐらと視界が揺れた。蟲車の前に、よろめきながら移動した——激しい眩暈。生暖かい液体が傷口からとめどなく流れ出ていくのを感じた。生臭さがより近づいている。

その刹那、左手の闇のなかから男の悲鳴が聞こえた。と同時に、風。

ふらつきながらも、走った。暗闇の奥。かすかに緑月の明かりに光るもの——それは苔むした岩のようにも見えた。

その岩が、跳躍した。

私の頭上を越えようとした。

かろうじて右手だけで剣を振るった。もはや左腕の感覚はなかった。

何かを断ち斬った手応え——岩どころか、人よりもつと柔らかいもの。一瞬のうち、生臭い匂いを放つ液体が、私に降りかかった。

地面に落ちた巨大な「もの」は、まだわずかに動いていた。視界は揺らいでいる。ふらつきながら、剣を突き刺した。あえぎのような音が聞こえた。一気に斬り下げた。

そして静寂が戻った。

痺れが強くなっている。ちかちかと視界がまたたき始めた。

荒い息づかいが近づいてきた。一角犬のグンだった。

いつの間に車の下から這い出したのか、ソルドーが私の脇に立っていた。

「何なんだ、これは？」

ソルドーの喉からかすれた声が漏れた。

それは、ぶよぶよとした肉塊のようだった。私自身、噂には聞いていたが実物を見るのは初めてだった。

全長は私の背丈ほどあるだろう。黒い背中には無数の赤いイボ。腹側は白いはずだが、私が斬り裂いた傷から、鮮血と紫色の臓腑が飛び出していた。

「オオガマの一種……南の国の一部に生息しています。凶器は……こいつの舌」  
十エーム（約三メートル）ほど離れたところに、丸太ほどの肉塊が転がっていた。私がぶった斬ったガマガエルの舌に他ならなかった。

「誰が……誰が、この化け物を操っていたのだ？」

ぐらぐらと視界が揺れる。そんななか、手提げ灯の明かりが見えた。

「おお、ゴルカン、ゴルカン。こやつには手こずったぞ」

フピースは、相変わらず物乞いと変わらぬ布を体に纏っていた。その足元に、細引きで両手、両足を縛られた若い男が転がっていた。グンが近づき、うなり声を上げる。

「真の呪技遣いなら、わしごときに捕まらぬだろうて。のう、リンゼンとやら」

私は、時間を無駄するのは嫌いな性分だ。

夕刻になつてようやくフピースを見つけ、ナツシマの屋敷の裏口で拾った粘液まみれの石を見せた。フピースは一見して、「マダラドクヤリオオガマ」の唾液だと見抜いた。フピースが似非予言師なのか本物なのか、私は混乱するばかりだ。半信半疑のまま、私はフピースに自分の周りの警護を頼んだ——決して頼りにはならないが、用心棒の用心棒だ。

痺れた頭でも、アッカ豆畑の脇の小径に人の気配を感じた。

「ナツシマ、少なくともあんたは手を汚していない。消えるなら今のうちだ」

私の隣では、まるで魚のように、ソルドーが口を上下にはくぱくと開閉している。無様に転がったリンゼンがかすれた声で言った。

「ナツシマ、逃げろ……俺が馬鹿だった、人の復讐に手を貸すなんて……蛙神よ！」

「そう、ほんとうに馬鹿ね。しかも、あんな小娘の色香にころつと籠絡されて……恐ろしい娘だわ。あたしは、ほんとうに逃げるわよ」

「待て、ナツシマ……」

追い駆けようとしたソルドーは道に転倒した。

「何だ？ 何があった？ どういうことだ？」

ソルドーはわめいた。フピースが、どこから取り出したのか、細く長い煙管を手にしていた。一服すると、緑月を見上げた。

「旦那、世の中には、知らなくてもいいことがあるのだ。知れば、おまえさんは死ぬ

まで不幸を背負い込むだろう。わしの言葉は金の言葉、ありがたく受け取れ」

「戯言を！<sup>たわごと</sup> ゴルカン、貴様はわしに雇われておる身だ。どういうことだ！」

私は、徐々に朦朧としてゆく意識のなか、言葉を選びながら、答えた。

「このリンゼンは、ナツシマの兄だ。ナツシマから、あんたの本妻、ミルーさんの不幸を聞き、強く同情した。あんたから搾り取るだけ搾り取り、そしてガマの怪物を使って、殺そうとした」

「そんなくだらん話が信じられるか！ なぜ、見ず知らずのミルーのために、こいつに私は殺されねばならんのだ？」

ソルドーがわめいているなか、まったく感情のこもらない声が、割り込んできた。

「俺は、あんたを殺しそこなつた。それでいいだろう。<sup>はりつけ</sup> 磔にでも八つ裂きにでも、どうにでもすればいい……」

リンゼンだった。ソルドーは地面に転がったリンゼンに一度、足蹴を喰らわせた。そして、くるり、と私に向き直り、私の上衣を掴んだ。

私は血を失い過ぎていて。早く横にならなければ、と思った。

切れ切れに、ソルドーの怒声——ほとんど意味を成さない雑音だ。

——怖い娘とは……

この近くで知っている場所といえば、〈彩雲亭〉か。ナツシマの館は、もぬけの殻だろう。

——教えろ……

こんな姿で〈彩雲亭〉に行けば、女将に叱られるだろう。フィエルは泣くだろうか？ いや、約束したのだ、グンを連れて行く、と。グンの姿を見れば、きっとフィエルは笑顔を見せるに違いない。

混濁した意識のなか、もう一人の少女の姿が浮かび上がった。もはやその顔立ちもはつきりとはしなかったが、そのか細い後ろ姿は、昏い昏い影に覆われている。

私は気を失った。

眼を開くと、鋭角的な男の顔が見えた。銀色の頬髭に、角張った顎。四十がらみの男だった。



「結局、だんまりを突き通すつもりか、ゴルカン」

物静かだが、威圧感のある声だった。

私が〈彩雲亭〉に担ぎ込まれてから、五日が経っていた。もともと、私にその記憶はないが。三日間、眠り続けていた。一昨日、目覚めたばかりだった。それ以来〈彩雲亭〉の世話になっている。

「もう全部話しましたよ。まだ傷が痛むので、休ませてもらいたいんですが」

髭面の男——黒帽隊隊長のギンセルの声が、ますます威圧感を増した。

「今朝未明、ソルドー氏が刺された」

反射的に起き上がった。もはや痛みは感じなかった。

「それに、孫娘のダーミアが行方不明だ。何者かに拐かどわかされた可能性がある。黒帽隊全員で捜索にあたっているとこだ。ゴルカン、おまえは何を知っている？ 呪技遣いのリンゼンは昨日の朝、吊された。絞首刑だ。ガマガエルの化け物は貴様が斬り殺した。では、誰の仕業だ？」

私は乾咳をした。

「ソルドーの容態は？」

「明日までもつかどうか……。短剣で正面からひと突き。かなり近い間合いから。短剣はソルドー氏の私物だとわかっている。下手人はソルドー氏の知人——近しい者であることは間違いない」

ギンセルは髭をなでた。

「ソルドー氏の奥様、ミルーさんの容態は？」

「今朝は、ほとんど意識のない状態だった。あの方も、ご苦勞をなさった。お可哀想な方だ。ゴルカン、知っていることがあるなら、すべて話してくれないか」

「ワーガス副長は？」

「ワーガス？ 私はもともと奴を信じちゃおらん。ソルドー家に縁故があるというだけで、副長におさまっているが、無能だ」

ギンセルはため息をつくとき、私をにらみつけた。意志の強さと理知的な光を湛えた眼だった。

「また来るぞ、ゴルカン」

「いらつしゃつても、話すことはありませんよ。それに、ギンセル隊長——」  
私はじつとギンセルを見上げた。

「あなたは、真相に気づいているんじゃないやありませんか？」

しばしの間があった。ギンセルは私に背を向け、

「また来る。この村には、貴様のような人間が必要かもしれない」

言い残し、部屋を去った。

ほぼ入れ替わりに入ってきたのはフィエルだった。両手に粥の入った木碗を持ち、背後にはグンを従えている。フピースが、昨日、私の小屋から連れてきたのだ。

「グンったら、一度走り出すと、止まろうとしないの。すっかり疲れちゃった」

フィエルは、寝台の脇に粥の木碗を置くと、屈託のない笑みを見せた。グンはすっかりフィエルに手懐けられてしまったようだ。

ふと、脳裏に黒い影がよぎった——闇色の瞳を持った少女の影。

今、どこにいるのか。生きているのか。なぜ、あのような深い闇を抱えることになつてしまったのか。村を去った少女が、一人で生き延びることができるのか。

「ゴルカンさん、どうしたの？ 凄く怖い顔してる……」

「いや……ひよつとして、グンをきみに取られてしまうのかな、と思つてね。なあ、グン。おまえは私とフィエル、どっちを選ぶ？」

一角犬は、私の言葉を理解しているのかいないのか、フィエルの手を舐め始めた。「ちよつと、ゴルカンさんに怒られちゃうよ！」

一角犬と戯れるフィエル。屈託のない笑顔で振り向いた少女に、私も笑みを向けた。しかし私の胸裡からは、小さく、か細く、闇のように昏い影が、いつまでも去ろうとしなかった。

「闇色の眼」完